

# 経済危機の構図 (12)

日専連名誉講師 富山短期大学名誉教授 川中清司

世の中は、どう変わるか

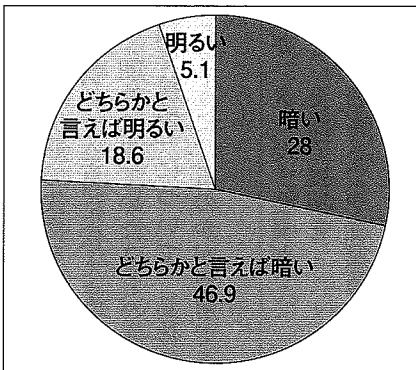
将来予測について、不安な要素が多い。環境破壊と地球温暖化が進む。金融市場では暴走が続き、経済危機が再来する。財政赤字が累積し、消費税は大幅に引き上げられ、国債の評価が下落するなど、暗い話題ばかりだ。

だが経済以外にも、人間の幸福を測る尺度はある。明るい将来を目標として進むと、どんな道があるのだろうか。

■日本の将来は暗い―若者の意識  
日本の若者たちが描く未来は暗い。読売新聞が平成一五年に「日本の将来は明るいか」を、全国五〇〇〇人の若者たちに聞いた。「明るい」は五・一%、「どちらかと言えは明るい」が一八・六%で、合わせて約二割しかなかった。

これに対して「暗い」は二八%、「どちらかと言えは暗い」が四六・

「日本の将来は明るいか？」のアンケート結果



九%で、約七割五分が否定的な立場で答えた。「努力しても報われない」が七四・八%もいた。長引く不況、就職難と増え続ける失業率、市街地はシャッター通りと化し、世相は暗い。若者たちは、このような中で閉塞感を抱いている。

■幸せな家庭を求めるが：覇気は乏しく  
だが若者たちは、希望を失っていない。「どんな人生を送りたいか」の答えは、「好きな仕事につく」が六八・六%。「幸せな家庭を築く」が六一・六%。「趣味などを楽しむ」が五四・三%だった。

しかし、草食系と言われるように覇気がない。「人のためになることをする」は三〇%で、「有名になる」は一五%、「出世する」は一三%に過ぎない。天下国家を論じて、身を投げ出して社会運動にあたるといった、ひところの熱

血青年の気概は見られない。子どもたちを見ても、ガキ大将がいてみんなして戸外で遊ぶ姿が消えた。会話が少なく、テレビやゲームに熱中する。パソコンやメールにめり込み、表現力が乏しい若者たちが増えてきた。

■ブータンの国民総幸福量

雄大なヒマラヤに抱かれたブータン王国は、幸福度が世界一で、国民は明るく、九七%が幸福を感じている。面積は九州とほぼ同じ、首都ティンプーは標高二四〇〇メートルにある。国の政策は「幸福こそ、人と国家の究極」とし、「世界一幸せなブータン」を目指す。チベット仏教を守り続け、精神、真理、情緒を大事にし、幸福度の教育に力を入れる。国民の笑顔を増やすことが幸福そのものなのだ。

日本とは友好関係が深く、昭和天皇の崩御の際は、一カ月も喪に服したという。二〇〇八年に憲法が公布され、王政から立憲君主制に変わった。国民はむしろ、今までの王政を求めていたのだが、国王自らの強い発意で政体を変えた。経済的には決して豊かではない。GDPは世界全体で一二二位（二〇〇五年）で、国民一人あたりのGDPは約一〇〇〇ドル、日本（三

万五〇〇〇ドル)の三五分の一しかない。ブータンでは、国力を表すのは経済力ではない。自然環境の保護が経済よりも優先する。憲法で森林面積が国土全体の六割以上と定め、野性動物の生存を脅かすような商業・工業活動を禁じている。

### ■自然と経済の調和を守る

ブータンは、生産性は低く所得も低い。家屋も貧弱で自動車などの現代的な資産も乏しい。だが、人と人とのつながり度を価値観とし、支え合って生きている。夫婦、家族、店の仕事、それらを大事にする。村が一体となって牛を大事にする。牛乳、バター、チーズを作り、それを食べれば健康になり、売れば潤う。

世界で唯一、交通信号機のない国で、伝統文化を大切に守る。自動車道路の建設も、生態系が壊されたり伝統農業の維持ができなくなるようなときは認められない。土地という公共資産をみだりに処分したり、環境を破壊するようなことは許されない。

水力発電所を建設して電力をインドに売ったり、高山で採れる薬草も輸出している。得られた外貨で国内インフラを整備している。

自然と経済、伝統と開発などの調和が見事に保たれている。

しかし、ブータンにも例外なく地球温暖化による危機が迫っている。北部にある二〇〇〇以上の氷河湖が、温暖化で決壊し、大災害が危惧される。一九九四年一〇月には氷河湖が決壊し、首都プナカに土石水流が押し寄せた。

### ■東京都荒川区が目ざす幸福実現都市

東京都民の生活満足度は低い。平成一六年に都が行った調査結果で「満足」は五〇%、「不満」は四五%だ。満足は昭和五二年の調査開始から最低となった。

東京の荒川区は、幸福実現都市を標榜し、「犯罪のないまちづくり」を目指している。平成一六年三月には防災都市を宣言。西川太郎区長が求めるのは、カネがなくてもできるオーダーメイドだ。温かい人情があふれたまちを守るため、区民一人ひとりが防犯意識を持ち、地域一丸となって安心して暮らせるまちづくりを進める。

小学校の登下校時には、お年寄りが校門に立ち、子どもたちに話しかける。ニコニコ笑顔で会話ははずみ、地域の絆が広がる。区民は黄色い防犯ベストを着て自転車

に乗って、街全体に防犯・安全のムードが漂う。警備会社に依頼するよりもコストは少なく、防犯効果を上げている。

### ■幸福度は期待と現実の差

人間には共通した欲求がある。衣食住や健康を願う身体保健の欲求。良い家庭を持ちたい、勉強する余裕を持ち、趣味・娯楽を楽しむみたいと願う自己実現の欲求。

「評価してほしい」「目標を達成したい」「変化を求めたい」「緊張

から解放されたい」「安定したい」「参画したい」「公平を求めたい」「自尊心を保ちたい」「チャンスをつかみたい」などの欲求がある。

こうした欲求を満たし、目標を達成しようとする努力する行く手には、必ずといっていいほど障害がある。たび重なる失敗が続くと、人は欲求不満に陥り、さまざまな反応を示すこととなる。ある時は攻撃的・反動的になり、ときには逃避し、退行したりする。引きこもりや自閉症などの病的な症状に陥ることにもなる。

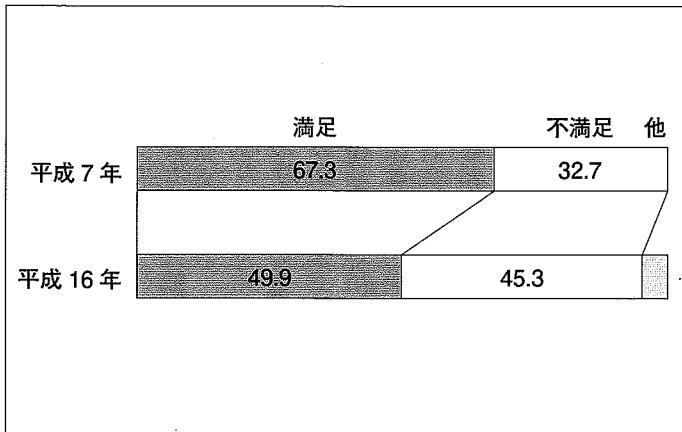
その障害を克服して進むためにも、お互いの理解と協調が必要となる。満たされないまま過ごしていく過程でも、支え合って生きていくこともできる。人はみんな欲望や願いを持っている。

その期待と現実の差が幸福度なのだ。願いや目標を持ちながら、それに向けて踏み出せないでいる。現実は今日の生き方の積み重ねだ。自分を変えようと思つたら、今の生き方を変えることだ。

### ■ラビバトラの予言―資本主義は破綻する

二〇一〇年の世界同時大恐

東京都民の生活満足度 (東京都調査)



慌の発生で、資本主義が崩壊する——こんな大胆な予言をした学者がいる。その人の名はラビ・バトラ。アメリカの経済学者だ。今までも、「ソ連の崩壊」「一九九〇年の東京市場の株式の大暴落」「日本の好況は二〇〇八年半ばまで」「アメリカの大企業の破綻が続発する」ということなどを予言している。世界的経済の崩壊を予言する多くの本を出版して、イグ・ノーベル賞を受賞している。

予言によれば、一九九五年を皮切りに世界大恐慌が始まる。地震・天候異変・疫病が起こる。腐敗したシステムのもとでは、人々は倫理に背いた行動、犯罪的な行動に走る。それらの行動は自然に対する否定的な行為であり、それを押しつけられた自然は、その歪みを災害という形で人間社会に送り返してくる。

こうした大変動が五〜七年間続き、二〇世紀末のほんの数年間で、世界は大変身を遂げる。二一世紀の最初の一〇年間で資本主義は必ず終焉するという。

■明るい未来—プラトウ主義経済が来る

そして、「そのあとに新しい社会システムが生まれ」と、未来

を明るく描いている。その社会は「プラトウ主義経済」という。「プラトウ」とは、「進歩と連続」を意味する。地球上のあらゆる資源を、進歩の力によって効率よく役立たせることができる社会だ。具体的には、均衡のとれた貿易、均衡ある財政、自国産業が保護され、環境を保護し、銀行規制などで所得格差の少ない安定した共存共栄の社会であるという。

ラビ・バトラの予言は決して思いつきではなく、根拠に経済学的な論理を据えている。南イリノイ大学で経済学博士号を取得し、テキサス州ダラスのザサン・メソジスト大学の教授で、国際貿易論を教える。また、毎日三〜四時間は瞑想しており、それを重ねることによって「自然の摂理を知り、意識の大海原である、神の存在を感じ、神の意志を確認する」と言っている。

■社会の循環—上昇期と下降期

あらゆる時代に、発展と衰退の二つの局面がある。支配者層の内には汚職が蔓延し、腐敗が進む。やがて反対派の活動によって支配者は衰退していく。社会循環法則図は一九九〇年の時点で、世界の各地域が、どのような社会循環の

位置にあるのかを示し、予測している。

- ・ アフリカの発展途上国は、武人の時代の衰退期のどん底。
- ・ ロシア(当時のソ連)は、武人時代の衰退期にあり、黒点で示され、革命が起こることを予測できた。一九九一年に共産主義は崩壊した。

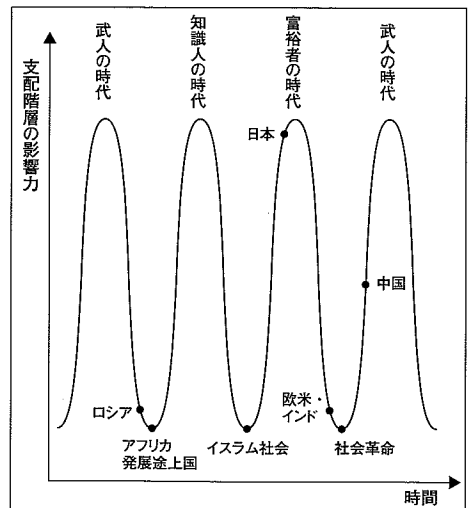
- ・ 中国で革命が起こり、軍人が実権を握ったのは一九四九年で、まだまだ大きな変化は起こらず、武人の時代が続く。

■崩壊原因は富の過度集中—大事な供給と需要のバランス

ラビ・バトラは、資本主義が崩壊する原因は「富の過剰な集中」と「自由貿易」にあると、次のように説いている。

「現在は、世界でごく少数の資産家に富が偏り、その偏った富が、世界の金融経済を動かしている。その一方で、明日の生活の糧もままならない貧しい人たちが、数多く存在している。貧しい人たちは、お金がなく消費することができな

社会循環法則図 (1990年)



—参考：ラビ・バトラ「世界大恐慌」藤原直哉訳—

い。日本では一%の金持ちが二五%の富を、アメリカでは一%の金持ちが四〇%の富を、それぞれ所有している。

国際競争が激化すると、競争力をつけるためにコストを下げ、賃金を低く抑え、結果的に消費が鈍化し、経済活動の歯車が回転せず、不況に陥る。健全な経済は、供給と需要のバランスにある。これが壊れると、多くの失業者とインフレーションを招く。このバランスが保たれてこそ、「生産が拡大し↓賃金上がり↓消費が増加し↓投資が拡大し↓経済バランスが維持されていく」という消費賃金こそ、需要の源泉であり、購買能力である」

## ■予測の可能性と神秘性

人間は、今までの経験から判断して、ある程度「こういうときは、こうなる」という予測が可能である。「春になったら花が咲く。今年は京都へ花見に行こう」といったふうに、未来を予測しながら生きていく。

世の中の出来事は、繰り返してやってくるが多く、予測も当たることが多い。普段はそれが当たり前なのだが、何か重大なことで予測が当たると「どうして当たったのだろうか」と神秘性を感じる。

「いつ地震や戦争が起きるか」などといったことも、その可能性を想像はできても、はっきりした時期となると予測は難しい。だが、そうした通常の能力では、できないことを予言する人が現れる。心理学の世界では、予知は「偶然的中」だと言われている。

人間はいろいろなことを想像しながら行動する。「予定時刻に間に合う」とか「売上げは達成できる」などと、頭の中で考えながら生きている。持ち合わせた知識や経験で、その可能性を割り出そうとする。さらに何か絶対的な力にすがろうとする。

結果的にその想像がはずれても、忘れてしまう。しかし、偶然に的中した予測を強く意識し、それを繰り返すうちに「予言化」し、超能力や予言者を生み出す。金融危機と社会不安の今、予言を超えた良い社会が来ることを祈りたい。

## ■日本人に求められるもの

欲望むき出しの市場原理主義の中で、多くのものが失われようとしている。利益だけを追い求めるガリガリ亡者が氾濫し、「つつましさ」や「わびさび」「人を利し自らを譲る心」が消えていった。今、日本人に問われているのは、「世のため人のために生きる喜び」、長らく培ってきた「和の心」である。「己を捨てて人を助ける慈悲の心」という、日本人にとって大事なことを失ってはならない。

人間は経済だけでなく、思想や理念を求めなければならない。モノを超えた心の世界と言ってもいい。深い思索と反省ができる人間性を追い求めることだ。欲望のままに流される人間から、自らを自由にコントロールできる人間へ進化することが求められる。それが自由に行けることが、本当の自由を意味する。

「自由は必然への洞察である」

というヘーゲルの言葉は、意味が深い。いくら自由気ままに振る舞っても、所詮、行き着くところは、大きな宇宙の大きな動きに支配されてしまっている。

## ■豊かな風土―同化した精神構造

日本には美しい四季がある。春に花、秋の紅葉、冬は野も山も銀世界となる。季節風が吹いて雨期が恵みを与え、真夏の太陽の輝きが黄金色の稲穂を実らせる。山から流れるミネラル豊富な河川が平野を潤し、海原に注いで豊かな海の幸を育ててくれる。

モンスーンアジアの中でも、特に日本は春秋に富む。季節が繰り返えされるなかで、経験が生かされ、長老を尊んで祖先を崇拝し、平和を愛する心情が豊かに育ち、調和のとれた社会が生まれた。

日本人は同化された精神構造を持つている。聖徳太子の和を貴ぶ精神や、神道や仏教や儒教が、それぞれ融和されて日本独特の精神構造が生まれた。山川草木、ことごとく神仏が宿るとされ、村には鎮守の森があり、氏神さまを祀り、秋には実りを感謝して祭りを祝う。日本は豊かな協調社会であった。この社会文化を大切に守り継がなければならぬ。